



あなたのそばに人権相談員がいます!!

発行人 牧坂秀敏・小宮 豊

人権プラザ便り [結い]

(公財)東京都人権啓発センター 〒111-0023 台東区橋場1-1-6 TEL.03-5808-9682 (直通)

**見知らぬ人々の人生が交差する、フラットホーム。
「話せてよかった」と心が晴れ、明日への希望の力に。**

本人と家族を支える 認知症ケア



2012年が明けました。今年もどうぞよろしくお祈りします。

新年早々、明るい話題を一つ。週2回のデイサービスを利用しながら認知症の妻を病弱な夫が支える老老介護。夫の介護負担を軽減するとともに、妻の認知症の進行を抑えるためにホームヘルパーの利用をすすめましたが、乗り気ではありませんでした（「結い」第16号を参照）。

ところが、うれしい変化がありました。支部の新年旗開きで、「いまは、週2回1時間程度だけど、ヘルパーさんと一緒に料理をつくったりしているようです」と日ごろから気にかけている支部の女性が話してくれました。「よかった!」、胸を撫で下ろす気持ちです。「支部のなかで、見守りとかできるだけのことはやっていきたい。認知症の学習会もできたらいいね」と意欲的です。

認知症ということでは、本人も介護者も大変深刻で厳しい状況にある人もいます。「会社の同僚のことで相談したい」という電話を受けました。

その同僚は認知症の母親と2人暮らし。仕事を休むわけにはいきませんから、母親をデイサービスなどに通わせたい。ところが、母親は拒絶します。人との交わりもなく自宅で一人過ごす日々。認知症が進んでいきます。認知症の人が安心して暮らせるには、「なじみのなかま（人間関係）をつくること」「孤独に放置しないこと」「良い刺激を絶えず少しずつでもいいから与えること」などで、周囲の人たち（介護に関わる人たちがさりげな

くあるいは意識的に関わっていくことが必要なんです、そのどれもが欠けています。

その結果、母親は家中のものを引っ張り出して、まき散らすという混乱の極み、修羅場と化しました。「母親の首を絞めて、自分も死のう」と切羽詰まったところまで追い込まれますが、なんとか一線を超えずに踏みとどまりました。相談相手に、担当のケアマネージャーがいますが、その人が頼りないとなれば如何ともし難い。

◇本人がどうしたいのか、心の声を聞く◇

私が認知症のデイサービスをやっていたときに、やはりデイサービスを拒絶する父親のことで、担当のケアマネージャーは当てにならないと、娘さんから相談を受けたことがあります。

「主治医からすすめられたので、施設を見せてもらえますか」と遠方から夫婦で来訪されました。その医者は、私が地域の人たちに呼びかけて認知症の学習会を企画したときの講師でした。娘さんは、認知症の進行をなんとか抑えたい、父親が行きたくなるようなデイサービスを探し当て、そこに通ってほしいと望んでいます。娘夫婦は、私たちの認知症ケアの様子や施設のなかをつぶさに見学され、認知症ケアに対する考え方などについても熱心に尋ねられ、「あと数か所、見学してから決めたいと思います」と帰られました。

ここが大切なことです。家族は「自分たちは素人だからよくわからない」といってケアマネージャーに頼りがちですが、自分たちの目でみて、親に合ったデイサービスを探そうとする姿勢です。

翌日、娘さんから「そちらに決めましたので、よろしくお祈りします。ただ、デイサービスを拒

否している父親にどうしたら行く気になってもらえるか、お手上げなんです」と愚痴をこぼされました。私たちのデイサービスを選んだのは、ゆったりとした時間が流れる施設らしからぬところ、利用者がそれぞれ思い思いに過ごしている様子などが決め手だったようです。

私が娘さんに提案したのは、「おいしい食堂があるから、ちょっと寄っていかない」と誘って、診察の帰りに来てみたらどうですか、と。古い民家で、広々とした室内、ゆったりとした雰囲気、玄関を入ると、デイサービスの施設とは思えない。父親に気に入ってもらえる自信はありました。

案の定、父親は「気にいったばい。ここだったら、週に何回か来てもよか」と頑固な表情が笑顔でゆるみました。まさに「案ずるより産むが易し」。

父親は子供扱いされ、施設側が考えたメニューをやらされるデイサービスではなく、自分らしく自分のやりたいことをやれる場としてのデイサービスを求めていたのです。威厳を持った一人の人間として振舞いたいのです。当たり前のことです。認知症である前に、一人の人間です。また、周りの人にはそのように相対してほしいのです。

認知症の人がどうしたいのか、その心の声を聞きながら、本人が満足できるサービスを利用できるように、地域にある社会資源（デイサービスなど）を自分たちの五感で見回すことは、本人そして家族にとっても大事なことです。

認知症介護ということでは、当事者同士で助け合う活動などを行っている『認知症の人と家族の会』があります。さきほどの相談では、最寄りの相談センターの電話番号もお知らせしました。

公益社団法人『認知症の人と家族の会』とは

1980年結成。全国46都道府県に支部があり、1万人の会員が励ましあい、助け合って「認知症があっても安心して暮らせる社会」を目指しています。

●家族の会による電話相談●

0120-294-456

◆土・日・祝日を除く毎日、午前10:00～午後3:00

◆研修を受けた相談員が対応

◆全国どこからでも無料

(携帯、PHSの場合は075-811-8418(通話有料))

※ホームページより抜粋

胸の内を明かす相談 —「出会い・縁」を紡ぐ。



電話相談は、ある意味では、「出会い・縁」という側面を持っています。お話をしていくなかで、どんどん気持ちが通じていく、共感していくことで、たしかに表情は見えませんが、相談者の呼吸まで身近に聞こえてきそうです。

つい先日のことですが、受話器を取ると、「こんな相談をしてもいいですか。知恵をいただきたいのです」ととても落ち着いた声で話し始めました。深刻な話なのですが、不思議と相談者の声は明るいので気持ちが和らぎます。「家族も含めて親しい人に話したことはありません」と、胸の内に溜まっているものを淡々と吐露していきます。

昨年12月に人権相談をインターネットで調べていて、東京都人権啓発センターのホームページをたまたま見つけたそうです。電話番号が載っている個所を印刷して、手元に置いていました。年が明けて、やっと話せる機会ができたわけです。

相談の内容から、不可避免的にこの方が生きて来られた半生をたどることにもなり、いつの間にか、2時間近くも経っていました。「こんなに長い間、傾聴していただきありがとうございます」と晴々とした声色で、お礼の言葉を言われます。

心労が重なってがんを患い、手術。いまのところ再発がないとおっしゃられたが、「誰かを不幸にするのでなく、みんなが幸せになれるといいですね。限りある命を悔いなきように生きたいです」と凜とした口ぶりに強い決意を感じました。

最後に「たぶん、電話することはないと思いますが」と言いつつ、ご自分の名前と携帯の電話番号を言い残して、電話を切られました。

しみじみと思うのは、電話相談でも、一人一人のかけがえのない人生の営み、その命の重さを受けとめることをなによりも大切にしなければなりません。我が事のように。それがあらたな出会いや縁となり、連なっていきます。

ふと天を仰いで、「今日は元気にやっているかな?」「体の具合はどうか?」と、思いをはせる人が一人、また一人と増えていきます。